

鐵網錄



特別
14
1919
14



○白石南山唱和

湘雲瓚語云、余年十六七、遊木先生之門、時請彦濟、笑
 石梁越仲通名達、戲做月且云、木門諸子登堂入室、蕩
 然可觀、詩白石、文芳洲、瑜之能書、佐之劇談、莫州善戲
 謔而不為虐、南山好飲酒、而不至醉、森子閉戶常晝眠、石
 子登樓動參禪、不患衣之弊、患德之蔽耳、又他日燕會
 名刻燭賦詩、筆墨淋漓、錦繡照座、南山唱云、白石題
 詩、白雲飛、白石即和曰、南山奏曲、南風鼓、當時風流雅
 趣、豁然可掬矣、今屈指已五十年矣、醉態吟容、宛然

在目矣、而覓諸君無一人在、獨芳洲兩先生松柏之姿、今猶蔚然、僕輩尚保餘喘、固所謂賊耳

○冒先賢姓名者多矣

南齊書武彞紀、七月丁亥、以驃騎中兵參軍董仲舒、為寧州刺史、余讀之不覺拍案云、武人木強、冒先賢姓名、前有曹參、後有董仲舒、又讀隨園隨筆云、晉書有顏回為卷帥、先武本紀、有城頭子路、通鑑有秦征西將軍孔子、帥兵五千人討吐谷津、唐貞觀時、新羅國有宰相文王、梁史有虞舜、官太常丞、然則冒先賢姓名、亦夥矣哉

○運開

換夏漫筆云、俗人動言運開、語似甚俗、然古人詩中用之、

謝靈運云、運開申悲涼、李白云、運開展宿憤、未可以陋俗目之、

○風光好

南唐近事云、陶穀學士奉使恃上國勢、下視江左、辭色毅然不可犯、韓熙載余妓秦弱蘭、詐為驛卒女、每日弊衣持帚掃地、陶悅之、共狎、因贈一詞、名風光好云、好因緣、惡因緣、只得郵亭一夜眠、別神仙、琵琶搥盡相思調、知音少、待得鸞膠續斷絃、是何年、明日後、主設宴、陶辭色如前、乃余弱蘭歌此詞勸酒、陶大沮、即日北歸

○詩動人

唐鮑溶長城下云、枯骨貫朽鐵、沙中如有言明徐文長春
日思宋諸陵云、白骨夜深語、諸臣地下逢、余每誦之、皮肉
生寒毛、詩之動人、有如此者、慎夏後筆

○沒風流

某藩士性好鳥音、一歲祇役于東邸、道經歧嶼、適見一
逆旅樵、問懸一鳥籠、中有告天子、其音清越、異常、
某士心欲之、口不敢言、時日尚早、託病投宿、少頃為愈、
召主人贈以所贖物數事、主人不解其意所在、謝以酒肉、
某士推所好之心、以為主人亦妻此物、不易得矣、欲言止者
數四、曰曩見樵、問之物、其音清越、不是尋常可獲、主
人勿吝、請以數金價之、主人驚愕曰、君已有不圖之、既不

知不謝、山驛之鱗物、聊宰其肉為下物、所羞之肉、乃清
越之肉也、某悅然自失、是些山陰老姥殺我、待王在、
一雙笑笑、慎夏後筆

近曰紅葉、テカノコシと抄作也、一語七文字同下

○黑夫人

隨園隨筆云、匡謬正俗云、姐者、妃號也、已者、干支甲
乙之稱、稱已者、當是妃位第六人也、余按史記殷本紀
并外戚世家、帝隱云、已姓也、姐字也、又明張蒼疑曜云、
姐已古書有作黜已者、說文白而有黑、曰黜、字統黑而
有豔曰黜、二說皆不離一黑字、則姐已之貌、斷非瑩
白矣、古有玄妻、亦云其貌如漆、有无可鑑、晉惠帝

穴あり同土犬上郡佐目村あり余寶曆八年正月こよ
る多賀野の神より五宮がうり奥也此中より風穴と
りありつもの風を生ず洞のよき二丈餘幅二丈半
廣き所より三四丈もある一所あり行きかゝの如きの洞穴
上下左右數十あるをせし一所のまきも又あるあり又
一所は地もあきて下階の奥の如く書してあるついで
方角を失ひぬきついで奥にこゝく是れ也
夫ついでいよ一里行てよこまきついで大のありこんをわ
たして伊勢國へ出たりとあるやいふやをいふ此處の
中前後左右上下すもあきなる所ありこゝく鐘乳也
上りさうなるみねの如くよこまき一圍あるがさ一石二石

或一犬二天より下へときえはしるのことくさるもあ
る側へさくみなる浪のことく流の如く或は牛馬の跡
背に似不動の塩火に似たり其形狀ことかみつし
うしし所も多しといふもまき大なるものほ新におよ
いぬらひといふ全上

○女上男下

神代卷伊弉諾尊、伊弉册尊、立於天浮橋之上、陰神
先唱曰、志哉思可美少男、焉陽神不悅曰、吾是男、子
理當先唱、如何婦人及先言乎、事既不詳、宜以改旋、
近代情死に男めを呼ぶ先づめの名をよみ不禮なり
大なる事し廿二の事なり阿倍久米と阿倍

公佯稱病、延見於卧内、其自奉只粥一盂、菜一碟、門生齎
訝曰、先生何清苦如是耶、翁曰、我食貧久矣、再尚未
之知耶、門生唯々、翌日餽以千金、一示貧而得金、一眩富
以得金、北蓼太姑置焉、顯仕如牧豕可鄙也、宜矣、削
髮納降、汚青史於後世矣、

○白詩文身

懷夏漫筆云、余弱冠時、見市中少年遍身刺三十六歌
仙、驚以為奇、後閱香祖筆記云、荊州街子葛清、自
項以下遍體、刺白居易詩凡三十餘處、人呼為白舍
人行詩圖、此視書團扇繡衣者奇矣、而出于市井之
流、尤奇之奇、是亦一雙在話

○政公の五代史

政陽公五代史を編て成るる後、年披るるありと曰、其地者、
杜之窮、るる善善惡惡の事ありと年披輯通を傳と
入くしる、政公も言さくしと止るる、五代史の地あるも瑕
疵多く考多るる、御海にんるる、其の錢氏重飲の虐
と記せらるる、つぎ或ん曰く、政公推友なる時、一妓を昵し、錢推
演の爲り、溺せらるる、永教、んを恨み、後よ五代史を作らる
及んば、年祖を誣るる、重飲民怨の事、を以てすと

○趙子昂の非難

趙孟頫子昂の書畫詩文共る長とて別し、書る於ては、縱橫
一筆、上下五十年の賜ありとも、宋の宗をたもたあつるる

其と云の粟を食ふ大節する先小徳の技取の美を
さへ何んかて大疵を補絶すまきや明の雲堪の松雪の畫
不題するは王孫今代玉堂仙、自畫茗菴飲輞川如此
青山紅樹底、耶無十畝種瓜田、と此一絶句廿八字、孟頫
の春竹の斧鉞さう又松雪曾て人の為に陶靖節の帰云
来の辭を書き其人と熟して拱壁玉の如し一僧あり巻尾
の絶句を題して云典午山河半已墟、暮寒宵逝望帰廬、
翰林学士宋公子、好事多應醉裡書、とこのも亦董南の
筆と云くし子昂の力をゆる東の辭の耐耐くと精神
發達の上る能くも人書くことを得ましかるや此二絶句
後世の筆面して福利を食うる人を懲創するまはるる
校定
漫筆

○東坡と荊公

唐以来宋及び沿襲して此れを以て士を取る神宗の世王
八南奏中して此れを廢し儒教を以て退治するところ成り
し人材萎蕩して振んきりし、荊公悔恨して云本欲愛
字實為秀才却愛秀才為字實とあり陳后山世系
傳りていへり
東坡と荊公と文格をわらふも東坡の文を荊公より重
しむる一層をゆへも吟沈及雪海して其撰倣する所を求めら
るる東坡の表忠親の碑を荆公後て此何号の文字を
言ふしを例する曾布の中て禁らるること思ひ口を極めて醜
詆す公に辱るものけす良、沈思して書子を拍り史記諸侯

五年表也と稱し再三嘗僕せしる常命報所として蓋終て
しと云ふ文字の批評の斯くあるべきもの也

○三才子

格宏漫草に云也世法人の三人の才子あり紀昀曉嵐趙翼
袁枚 子才 三人は漢学の愚謬に遠く未考の下
の事とをわづらひて経考を考ふるに紀昀の四庫全書
を校合して大憤懣の家とす趙翼は陔餘叢考二十二
史劄記を作ると史学家とす袁枚は詩文家とす

○袁枚未をわづらひ

今世仍る三傳の都下の袁才子あり昔のまゝと云ふ田
りしやうとあるは是なるを云ふ是れを述ぶる中なる比喩

るんとも是るも典なり宋の徽宗の初る蔡京の汚孫生
膏梁、不知稼穡、一日蔡京の法孫なり小、世書日、飯
と端小末の出入をわづらひ、其入處をわづらひ、從白子
裏出、京大の兒小、其入言ふるをわづらひ、不足我見、在席
子裏出と蓋京師運米以席囊盛之故云 曾敏行の獨
醒雜志
席囊は今用ゆる扱と云ふものなり 格宏漫草

○論漢孟子の古名

格宏漫草に云本朝の古昔の論漢を田珠証と外巻を録し
冊の小口かきも爾志ありと云田珠の義は皇侃の
疏に據る孟子の外巻を余世才と罵せしは史記の孟刺
傳に余世之宏才とあるを取るとあり

○幸陸坊海尊？

加州の小瀬復庵順元の話を録し云三十年寶永三徳許以前の癸月と云小瀬七家総の六十年のむらうの見ありと云
俗の事加州城下犀川と云一川の川、アサノ川の東西、
流ありを見て昔此方北に流ん斯に流んさうしと云
う事と云春日山と云山を見て此山を義経と云
檜の酒家あり事と有りつれ昔物作の判友辰十二
の作り山伏え通えしと云こと此形も無きゆらう南時
此地を過るんしむる甲人むらうえ方しと云此の癸月
のほそを流るぬんハ城下の田中と云はとらう一山を伴
りてハ松原宗吉と云六十年むらうの志を因にし穀を以て

食せり松脂を焼く服餌とす二人ともめりるありとも如
う誰云ゆすともなく癸月の幸陸坊海尊と云ハ松
ハ亀井六郎と云はハ昔の事どもを問ハハ不念
んを採ん為ハ義経紀と云なる子を披き志あり南あ
りと云ハ掉頭して不念なるハ斯くありんハ南と云
辨折すとも因てハ海尊なる亀井なるを識ると新井
白石の通記ヤしを見ハ 松宮俊重

提醒紀法もこんと向換の事を載せ海尊の
有る記と南と云ハ

○左ギ公年の争

松宮俊重と云後漢の先武の時う左氏公年の争

甚しく前漢の末は劉歆キの左氏を後漢末何休、鄭玄キも
て七北を争つて終つて左氏の勝利をぬかざる云とも三國
みても公羊左氏の争ひ不止、陳禧曰左氏直相斫言
耳、不足精意也傳王朗キせんとも鍾繇の左氏を大官、公羊
を賈解家と云へるをゆめとす大官は公儀の御其堂所
賈解家の圍子屋とす左氏と二傳の優劣は此後を盡
し

○昔の江戸

武江年表又本八年の條云今年江戸町割を余し給
ふまふ見ゆ事日本二十餘町の入歩をよせ那田の山を
崩さん今路の南の入海四方三十餘町埋さる在家を

主を給ふと系

是まし大名小路の邊八代河原存道三河岩の邊
町の邊等々所を運してありしとを凡江戸の邊ありし
八代田宝田存田甚あぶの村とす傳馬所は傳馬所
ハ代田村の内とす大傳馬所ハ宝田村のうらとすしとを
ハ代田宝田の邊とす今の此の口方の邊とすといくハ
村の本石所銘所の邊也横河村ハ今の横河町の邊とす
しつハ傳馬所とすもの此の邊に福をせんしつとす
ハ尤古くハ折入の町に伝ひしつハ神楽といつハ
の町をさすしハ天正九年の事とすしつハ式古池とい
くハ三河所の江戸ハ折入の村三河をさすハ十人を
せん此の

妻を付し、嘗て我敗れを思ふまじし、時高和而、牛牀と同
味す、後、山崎舎言、清くを思ふ、あんに、隙に、あいたと
見、之を、何、か、冷め、た、か、た、わ、い、と、舎言、之を、中、々、と、亦、其、大
腕、と、も、長、き、者、と、あ、き、き、と、後、入、り、後、の、り、事、所、等、の、を
割、り、と、う、し、し、此、的、の、を、止、ま、う、と、其、三、田、尾、の、を、せ、し、と、き、(文
久三年)の、か、き、日、の、娼、女、の、け、き、寒、衣、襦、袢、を、取、り、来、り、し
之、れ、と、舎言、中、々、と、思、ひ、け、り、互、き、き、と、あ、き、き、(後、入、り、候、青
夫人、の、を、中、々、候、者、の、面、あ、り、た、と、中、々、と、候、し、し、候、者、の、
振、れ、し、し、と、思、ひ、き、き、と、人、の、流、る、と、思、ひ、い、わ、い、と
い、し、ま、り、め、の、言、況、を、あ、き、き、と、

○俳典上の微塵

一由旬の大々を四、割ハ一拘盧舍と云、一拘盧舍を千割
ハ一弓と云、一弓を四、割ハ一肘と云、一肘を二、割ハ一拵
手と云、一拵手を十二、割ハ一指節と云、一指節を七、
割ハ一麦と云、一麦を七、割ハ一苺子と云、一苺子を七、
割ハ一蟻と云、一蟻を七、割ハ羊毛上塵と云、羊毛塵
を七、割ハ羊毛上塵と云、羊毛塵を七、割ハ兔毛上塵
と云、兔毛塵を七、割ハ眼所見塵と云、所見塵を七、
割ハ都致塵と云、都致塵を七、割ハ阿耨塵と云、
阿耨塵を七、割ハ一微塵と云、一微塵を七、割ハ大莊嚴塵と
云、大莊嚴塵を七、割ハ一微塵と云、

○不可説不可思議の事

華嚴經に曰、百千の数を百千とせしむと一拘梨と云く、拘梨の教
を又拘梨とせしむを不変といふ、不変を不変、那由他と云く、那
由他と那由他、鞞婆邏と云く、鞞婆邏と鞞婆邏、一作
と、一作を一作、一來、一來を一來、一勝、一勝を一勝、一復次、
復次を復次、一阿婆羅、阿婆羅を阿婆羅、一得勝、得勝
を得勝、一公界、公界を公界、一充滿、充滿を充滿、一量、一量
を一量、一解、一解を一解、一離欲、離欲を離欲、一離欲、離
欲を離欲、一捨、一捨を一捨、一聚、一聚を一聚、一通、一通
を一通、一頻中、頻中を頻中、一網、一網を一網、一衆流、衆
流を衆流、一出、一出を一出、一沘、一沘を一沘、一分別、分別を
分別、一称、一称を一称、一持、一持を一持、一顛倒、顛倒を顛倒

不顛、一不旆、不旆を不旆、一心、一心を一心、一慧、一慧を慧
、一第一、第一を第一、一光、一光を一光、一毘遮伽、毘遮伽を
毘遮伽、一極高、極高を極高、一妙、一妙を一妙、一羅漢、
羅漢を羅漢、一訶梨婆、訶梨婆を訶梨婆、一解脱、
解脱を解脱、一因、一因を一因、一賢光、賢光を賢光、一明
相、明相を明相、一摩樓陀、摩樓陀を摩樓陀、一忍、一
忍を一忍、一杖、一杖を一杖、一摩樓摩、摩樓摩を摩樓
摩、一等、一等を一等、一離疑、離疑を離疑、一住、一住
を一住、不放逸、不放を不放、一摩多羅、摩多羅を摩多
羅、一動、一動を一動、一到、一到を一到、一説、一説を一説、一

白、一白を二白、一了別、了別を了別、一文を文、究竟を究竟、一
清涼、清涼を清涼、一阿羅、阿羅を阿羅、一潮、一潮を一潮
、一油、一油を一油、一祇羅、祇羅を祇羅、一味、一味を一味、一泥
羅、泥羅を泥羅、一戲、一戲を一戲、一斯羅、斯羅を斯羅
は一聚沫、聚沫を聚沫、一彌羅、彌羅を彌羅、一堅固、一堅
固を堅固、一風、一風を一風、一滴、一滴を一滴、不可稱量、稱
量を稱量、一根本、一根本を一根本、一微細、微細を微細、一蓮華、
蓮華を蓮華、一摩加婆、摩加婆を摩加婆、一不可度、不
可度を不可度、一醯樓、醯樓を醯樓、一語、一語を一語、一劫
、一劫を一劫、一娑波、一娑波を娑波、一阿、一阿を一阿、一無
間、無間を無間、一離垢、離垢を離垢、一實勝、實勝を

實勝は彌羅覆、彌羅覆を彌羅覆、一遮摩羅、遮摩
羅を遮摩羅、一法、一法を一法、一法は波羅摩聚、波羅摩聚を
波羅摩聚、一法定、法定を法定、一法、一法は波羅摩聚、波羅摩聚を
波羅摩聚、一法定、法定を法定、一法、一法は波羅摩聚、波羅摩聚を
波羅摩聚、一廣説、廣説を廣説、一無盡、無盡を無盡、一等真、等真を
等真、一眞戒、眞戒を眞戒、一阿槃陀、阿槃陀を阿槃陀、一青蓮
華、青蓮華を青蓮華、一教、一教を一教、一趣、一趣を一趣、一
受、一受を一受、一阿僧祇、阿僧祇を阿僧祇、一阿僧祇轉、
阿僧祇轉を阿僧祇轉、一無量、無量を無量、一無量轉、無量轉を
無量轉、一無分齊、無分齊を無分齊、一齊轉、齊轉を齊轉、
一無周遍、無周遍を無周遍、一遍轉、遍轉を遍轉、一無教、
無教を無教、一無教轉、無教轉を無教轉、一不可稱、不可稱

を不可稱は不可稱轉、稱轉を稱轉は一不可思議、不可思議を不可思議は不可思議轉、不可思議轉を不可思議轉は一不可量、不可量を不可量は不可量轉、不可量轉を不可量轉は一不可説、不可説を不可説は不可説轉、不可説轉を不可説轉は不可説轉々々、爾時世尊心王菩薩の爲めに偈頌を以日、不可説言説不可説、充滿一切不可説不可言説諸劫中、説不可説不盡等と五百句の偈文を説たまへり此は華嚴經の阿耨多羅三藐三菩提心王菩薩の不可稱不可説を問たまへり如來のこたへたまへる經文あり

○李太虚戲本

李太虚南昌人、吳梅村座師也、明崇禎中為列卿國

喪不死降李自成、本朝之鼎後乃脱帰、有举人徐巨源者、其年家子也、常非笑之、一日視太虚疾、太虚自言、病将不起、巨源曰、公壽正長不死、詰之則曰、甲申乙酉不死、則更無死期、以是知公之壽未艾也、太虚怒、然無如何、巨源又撰一劇、演太虚及龍其芝林降賊、後聞本朝兵入、急逃而南至杭州、為追兵所躡、遂於岳墳鐵鑄秦檜夫人跨下、值夫人方月事、追兵過而去、西人頭皆血汚、此劇已演於民間、稍々聞於太虚、適芝林以上林苑監、謫官廣東、過南昌、亦聞此事、乃与太虚、密召歌伶、夜半演而視之、至西人出跨下時、血淋漓滿頭面、不觉相顧大笑、謂各節掃地、至此夫復何言、然為孺子

辱至此，必殺以滅忿，乃使人俟巨源於逆旅，刺殺之。此事得之於蔣心餘編修。趙政北の卷之四 蔣心餘

○麵木酒樹

蔣曝雜記云：洛陽伽藍記有所謂酒樹，麵木。初不解，所謂余至廣西，乃知麵木即椴榔樹也。大者五六圍，長數丈，直上無枝，至顛則生葉，數十似椴榔，其樹中空，滿腹皆粉，可得十數斛。沸湯淬之，味似藕粉。粵人嘗以此餽遺。又廣東椰子樹，每一椰子內必有酒半杯，小者一勺許，甘香清冽，味勝於米釀，數倍。此即酒樹也。

○野象

蔣曝雜記云：璞函隨經略至猛拱，每晨起，途中多有糞堆如十塚，土人云：野象糞也。其象不受人驅策，故謂之野象。必誘而馴之，始供役。誘之之法，掘地坑，布席而去，覆之，若平地，數百人鑼鼓鉦鼓，驅象過而隔之。象體重而坑深，陡不能出也，則餓之數日，然後問之，肯給役否。象點頭，則馴其坑前地，迤運斜上，使步而出。一點頭，則終身受人役，不復變。蓋象性最信也，負重有力，一象能馱千斤，破一位，故緬人出兵，隨路有破也。象不點頭，則不使出，餓數日，再問之，亦有餓死而終不點頭者。

○惜字命

得一錄：惜字命條程七輯，其の大意は、惜字命、人、世、斯、世、父、生、之、而、師、教、之、師、者、所、以、成、我、而、舍、字、則、無、以

及劉海壽標為記者則花樣之便於通用可知也。客曰：花樣
自己縱能分別，恐買主無由認識，主顧或從此減少，經營
者能不受累乎？余曰：不然。各鋪俱有招牌懸掛，買主必
先信其貨之真，方肯進店，以輿論至公，耳目甚近，豈
區區於包裹紙上刊刻字號，遂能招之使來乎？則買者
必不愚其紙上之空法，以去取可知也。客曰：近者已矣，遠
省高販，尤以店號為憑，今改花樣，將何以使遐邇馳名
者生理仍得茂盛乎？余曰：客慮至此，可謂詳且盡矣。
然不有茂票為憑乎？包紙及瓶瓿瓦上，即不用字，其
茂票上自可詳載店號居處也。況四遠馳名者，每多冒
其店號，他者豈不洞悉其弊，而必恃此以取信乎？即

使以此為信，茂票豈反不足憑乎？且用花樣，即可垂刻於
茂票上，以為暗號對核，如是遠近亦必將辨其花樣
以為憑矣。既積功德，又免假冒，其生意不更茂盛乎？余
於七年前見香鋪及烟鋪，其包紙俱用字號，近日皆
改用花樣，貿易未見其有不便，而生理未嘗不茂盛也。豈香
鋪及烟鋪可用花樣，而他鋪獨不可做用乎？客休矣。其毋
以此為慮。乙卯歲在乙卯年歲在乙卯年夏之月，樹德子
敬花主人謹跋於兩棠軒。

○ 讀書叢燬

支那通光年中令在茂一七讀書之燬事，得一錄詳之。

今其の令の一を奉ぐ

本局奉憲設立之収燬淫書業經收得二百餘種并板片二十餘種照估給價燬訖惟各坊鋪中所藏淫書板本尚多已奉臬憲挨戶給示曉諭自應趕緊繳函以免日後覓察致于未便茲特將收過之種書目開列如藏有此等板本者務勅盡數交出此外各目尚多未能備載望各自行檢點一併送局幸勿遺漏自誤此白

照陽趣史	柳花影	七美图	碧玉塔
玉妃媚史	梧桐影	八美图	碧玉獅
呼春禪史	鴛鴦影	杏花天	攝生總要
風流豔史	陽春花影	柳花艷	構机同評

妖狐媚史	如意表傳	載花船	友唐
春燈迷史	三妙傳	扇花叢	文武元
濃情快史	蛟紅傳	燈草架	風點頭
隋陽艷史	循環報	痴婆子	尋夢和
巫山艷史	貪歡報	醉春風	海底撈針
繡榻野史	紅樓夢	怡情陣	國色天香
禪真逸史	續紅樓夢	倦袍	拍案驚奇
禪真後史	後紅樓夢	插錦倦袍	十二樓
幻情逸史	補紅樓夢	兩文歡	無鴛調語
株林野史	紅樓四夢	一片情	雙珠鳳
浪史	紅樓後夢	同枕眠	插錦雙珠鳳

夢約姻縁	綺樓重夢	同拜月	緑牡丹
巫夢縁	金瓶梅	皮布袋	芙蓉洞 <small>即去蜻蜒</small>
金石縁	唱金瓶梅	升而叙	乾坤套
燈月縁	續金瓶梅	唇棲志	錦繡衣
一夕縁	艶異編	錦上添花	一夕話
五美縁	日月環	溫柔珠玉	解人願
萬惡縁	紫金環	八段錦	笑林廣記
雲雨縁	天豹因	奇團圓	豈有此理
夢月縁	天寶因	清風伴	更豈有此理
邪視縁	前七回志 <small>非正文傳</small>	蒲蘆岸	小説各種 <small>福建板</small>
賤痴符	增補紅樓夢	石點頭	宜春秀質

柳花艶史	紅樓補夢	今古奇觀 <small>抽禁</small>	子不語 <small>抽禁</small>
水滸 <small>柳子五</small>	絲絲堂	七義因	何文秀
西廂 <small>柳子六</small>	三笑姻縁	花燈樂	野史曝言

其他小説之足以誨淫誨盜者一概悉禁收燬

○柏崎大塩餘堂事件

天保の末年五月の晦の地落格ある動天あり傳へ人の説きた事とて一めん中とのそとにさうし由りその法平に精とあり、そとを約め識さん石州濱の浪人見生田葉といふ事あり前年此をて敷をよき成る人壽も七果といふ事ありしや、遂に穴を思立ち十津佐右衛

鐘嶋ハナノの遺事ノ遺事ノ大目ト行ハるコト其ノ傳ハるト按ズるニ
伊予志ノ卷一ノ解ノのノ若肉成王ノの也
臣ニキリウトいふノ兵ノありテ勅ノ貴位ニ至ル相ノ早鬼ノ大臣ノ
と移リといふノ見ルこゝノをハ合ノの也又ハ傳ハるト
鐘嶋ト早鬼ト言ハしテ混シてハ鐘嶋トいふノ也
人ノ盛衰ノにハいふノ早鬼ノの也考ル所ハ妄ニ延ル也

○字 説四則

的ノ字ハウニと後ハ一五雜組ト以テ丹注面曰的古天子諸朱騰妻以
次進御有月事者難以口説故注北於面以為識如射之有
的云我俗志中の也的ト移リ亦是射の的ノ如シ外ノを求
めル義也

新根山ハ新羅と書けり桓武天皇の延暦廿年五月庚戌、疫
相模國足柄路、開新羅道以言高士燒碎石塞道也延暦廿年五月庚戌
女男と書ふトいふ長男といふセ家情を承嗣也と書ふト云々
小漢の天子代の稱と書ふト書ハるト被シて唱へル、其の義を九
のう墓碑と書ふト書ハるト志スと見て病々と書ハるト終ハひ感
かしの書ふトいふノの義を解せル也

十倍射と書ハるト義をとクとク也射ハ身に从ひす、小
小宜く短人の義と書ハるト短ハ矢に从ひす也、小宜く矢を及ハ
の義と書ふトと書ふト一記也ハ、小宜く矢を及ハ
の義と書ふトと書ふト一記也ハ、小宜く矢を及ハ

○十倍遠州の建采及國路

遠州の建采國路ハ、其の義を施し、其の故を尋ハるト遠州也

心付らぬもあきま我手記をばかんとていふもあはれ一禮をば
へしと存とをき我手記をいふをきかすもあはれいふ
ふ坊主せいの能事あはれいふをきかすもあはれいふ
あはれいふをきかすもあはれいふ

茶湯好す清く云ふ悟道可伏しををんし時を里の元
前守をぬ回く物々しくとてきく候はん茶給り共くと
道中より紙のほと月長きく紙をきかすもあはれいふ
大津の逗留養生もあはれいふの茶給りあはれいふ
三つさく思ふん二折即上林の庵をきかすもあはれいふ
同道ししあはれいふをきかすもあはれいふ
ふけり共く茶をばかんとあはれいふ

六月初つたええ大まき少く中三成あはれいふ
のあといと清しかういふいふあはれいふ
の聖まじつとあはれいふ
ところを遠州いふいふの又まじつと改次の本まのぬんく
といふいふあはれいふ
けぬまじつといふいふあはれいふ
のよの雨さくあはれいふ
あはれいふ大わらあはれいふ
あはれいふあはれいふ

○茶湯好す清く云ふ悟道可伏しををんし時を里の元

茶湯好す清く云ふ悟道可伏しををんし時を里の元

有之矣 八月中旬不見也 裏の太田津左のかき根のししと椋
の通う矢を是行故也 其の何人の椋をくしやと問答ある
之を吸乞と奥津次周部祐能御くまうしきふしと
答ふ 去田又彦側と在るや 豆腐はにせと甘草をお
まをまことお見れと云ふ 必る世に怪む 其を入る問を
問く 其を重き人の豆腐はの甘またのこ 其れ御生
死いさうし思く 守まの人の豆腐のぬくやばくうを 又甘ま
のぬく甘まぬくふと云ふしと云ふ 何うかぬ 扱るも問を
し 其れ御生 其れ豆腐を食なぬ 其れ人の守ま
を問ふ 其れ御生のやせうとく 又御生 打徳甘
ま入の御生を用み方なり 下トツサレは守ま人のけい

此ををあらうと云ふ 何れも指支をまのすしと云ふ 其れ
かし 也事は止はるは 其れ日計の万さう用う 其れきん
其れ文の市と云ふと 並るの文も 其れあを此の和氣
陽々なる一ふみの市をを畫めん

○
六位大酒官樽次ある日 神田の社まきし 神酒徳和を
見て御のしき

由世は神といはし 其れしきり
かんたとしきり 其れしきり

西行は河津國お歴の道次ある 其れ津の國七瀬川のほと
りしをまにかしを食いと云ふ 其れしきり 折ありあり

かりし馬上の侍、こゝをきて

この川は七瀬のかはとせきんたのせ

お宿を是れんかせわなむめ

といひけしむのとりあふぞ

この川は七瀬のあはとせきんたのせ

のしなる馬はせまわなむめ

とてさへしとせよ

〇馬の甚なり

山崎美成の女史伝傳る曰く元祿のころ京師京町通く
三平のころは橋本勘十郎といふ人ありしが書生
及古馬の鑑定をもよくせり其を生来希有の物

好むと幸の衣被より油夜もさしをこしく高橋を
着用し且つ扇子脱指の柄糸鏝印新中着き後
まもも馬のぬといふことありまほ朝夕の食おも
いとよく刻のしよを用よるおもも大なるハチ根牛
房のぬひともかく助あつちをのみ油に用ひるも
たまも馬筋の折れをいよしける志るあんど根
て着をこしをぬめるとあるも兵天性うもあつし
まをさるとせぬめつとまは心なると表二階の馬
もたまのの唐木もさるは世を是世とともも堀
柄のといふものを建てるこのところも大なる堅木
あつてもまもさるは唐木文飾あり底の大木

まゝの細き此書も一言半をこたへしつゝの意を録せらるる
中庭まゝにありてまゝ魚あまたおちおちこころわびの
そこの掃く掃拂をうけわししやうまの掃拂も唐もの
作りの葱熨^キ子^シを喜ばせけてけりまた十庭のついで
はの望まを寫し塗せけりこゝに廿のあそびと云
の勢なりと云ひけり云々

○菱川師宣の遺書

田舎の回ゆき掃可^ハ信^シみ^シにそのまゝ性^ノ賢^イいと女
卒^ニま^シり^テ常^ニあ^リま^シる^事と云ふことのみうし^ハが
ある年の七月十三日の夕にたゞの十巻をおもてり
の御火を録せけり云々

まづ掃可^ハ信^シみ^シの言半をこたへしつゝの意を録せらるる
中庭まゝにありてまゝ魚あまたおちおちこころわびの
そこの掃く掃拂をうけわししやうまの掃拂も唐もの
作りの葱熨^キ子^シを喜ばせけてけりまた十庭のついで
はの望まを寫し塗せけりこゝに廿のあそびと云
の勢なりと云ひけり云々

何といふれいの書おか又いづれ志やう

れうりんのさきいつけ者

○此系文論評

此系文論評

六家 大家朱川金屋立橋ありて磔死を筆
目と髪をそののち捨てるべし吾所の是より華
やうき

(三) 其の後ふと稱すきよの(華大智の侍従)の特なき
點

一 舞臺也 此のふと稱すきよのふと稱すきよの片
山里の林葉なる花をいふと云ふは(花由
花のて扶ま

二 美人也 其の大主人の人の世の経路をいふト
此のふと稱すきよの世の家をいふと云ふは
快しむるをいふの人也

三 愛 此のふと稱すきよの世の経路をいふト
四 光景 此のふと稱すきよの世の家をいふと云ふは
うらやまのふと稱すきよ

五 人物 愉快滑稽をいふ人人物をいふと云ふ
且つ人の世の喜かろくしと云ふは

六 家 大度なる橋の美をいふと云ふは
此のふと稱すきよの世の家をいふと云ふは

式部其初めをいふと云ふは
此のふと稱すきよの世の家をいふと云ふは

思ひてさし、自から書とこそ是る侍りぬと、涙七き、
か好侍りしふか、女は妻人けりしもの、姫のしく恨み
と發こせりけし事、う、五こかして、さす、さす、
涙を流かし侍りき、

○歌あな夜雑法


訥子曰假寐寤の狂て、枕打おる先、行拵と歩行
か、り、女部、う、つ、を、ぬ、う、と、あ、ふ、ら、也、又、可、愛
き、あ、を、見、し、う、入、目、と、見、ぬ、う、あ、い、く、も、あ、い、く、ま、
あ、い、鼻、を、見、ぬ、に、く、見、ぬ、也、女、人、市、の、ま、り、
曰、敵、役、に、随、か、り、障、り、ま、す、う、あ、い、く、も、あ、い、く、ま、
あ、い、う、う、み、の、ま、り、う、う、

山中平人曰敵役にせせり、う、あ、い、く、ま、り、
て、我、ら、で、さ、だ、く、女、を、思、あ、う、と、さ、い、く、ま、
二代目路考曰女形に女中、あ、い、く、ま、り、と、ま、り、と、思
は、い、く、ま、り、ぬ、ま、ぬ、す、う、あ、い、く、ま、り、
ぬ、こ、あ、の、や、う、ふ、女、の、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、
ら、の、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、
の、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、
扱、あ、風、俗、を、い、う、け、て、い、く、ま、り、又、女、部、の、あ、い、く、ま、
ふ、せ、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、
行、姿、也、女、中、方、の、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、
子、と、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、り、と、思、ぬ、う、あ、い、く、ま、

と思わさる人目もさる心をかきまはる
 瀬川路を頼^頼曰女の志を惚め抱付とまら男の
 あまのうらやまついで顔を描くそむけさるの
 またま海をるれなまきんかたくのまをたの方
 のまひささしんむたまのけさるのまは思わ
 也
 神子曰人とむさよき後者を是とまをまはる
 らぶ我がけらる下の後者の中より上手なるま
 まをさるさつら其まきまはししけ
 ばまはしと思えまはし終る也向をゆるは
 七日甲の下をゆるはまはしはまはまはまは

世歌
 反雜
 誌

○蒲鉾

菖あを雜銘云肥前四天子と製する魚饅の形長
 さ五寸餘徑七八分許細き條竹につけて所謂蒲の
 穂の鉾の如し是こそ中如蒲の鉾に似たりしと
 蒲鉾と号し古風なまはし

 或内をいさるのやを形をまはる中竹輪といふ
 ら形長大きといふも大同やまはし大蒲鉾といふ
 へきいものまはかりなまはしの縁切似るをいふ
 縁といふのまはしを又此太き竹のまはしを二割
 七まはしを扱つつけたるをま片といひしと

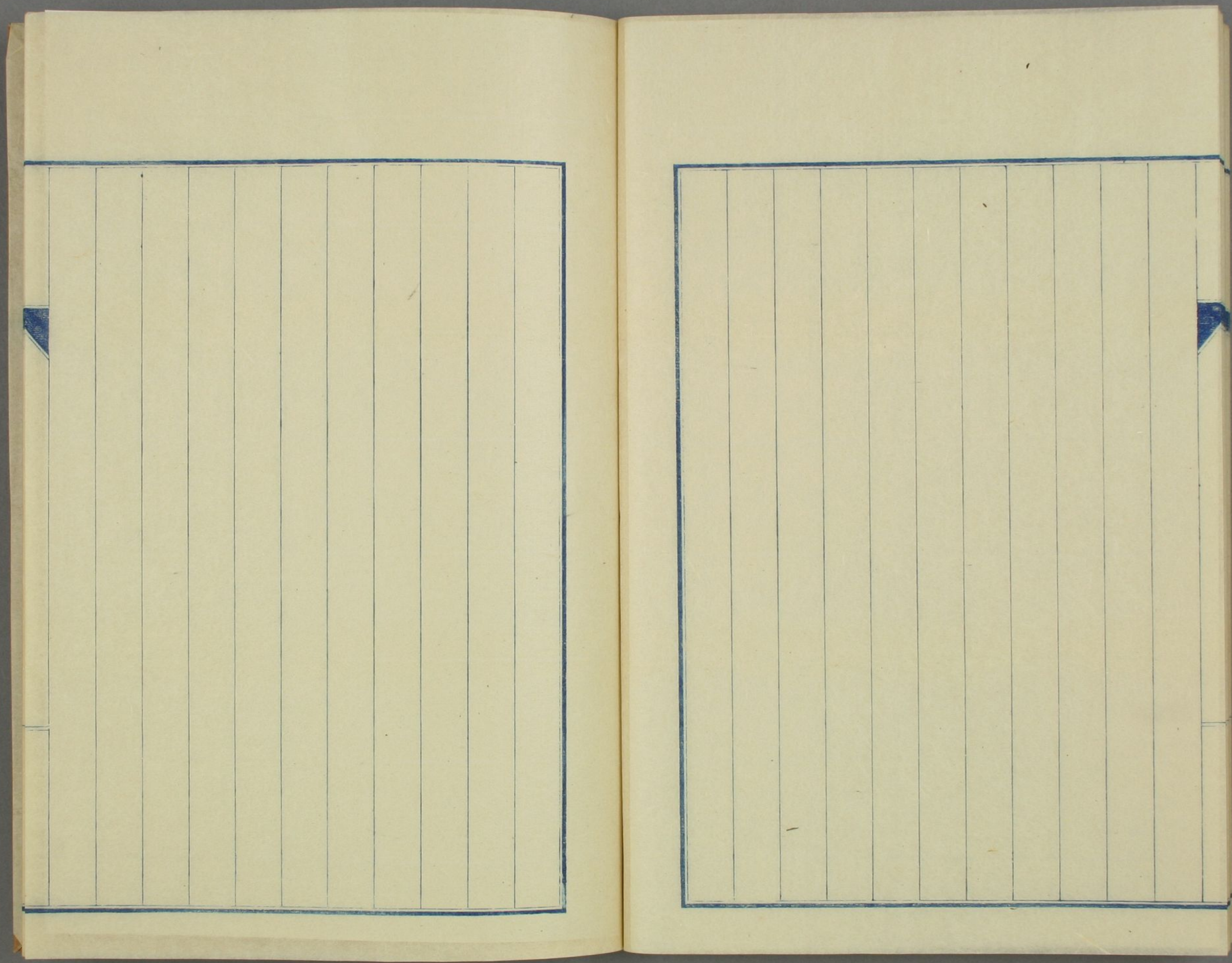
福翁百江、人心極度の極なり。修、向く主事奉府の
 吉申接事、録、法論の意、中西洋之、法は世人の耳
 りも、八んさ、その代、杉前伊直守と云ふ大名あり、固よ
 リ吾道の大なる、と、物、少、こ、も、あ、う、し、う、貴
 族、高、家、の、常、と、し、其、取、扱、は、扱、こ、の、お、教、寺、あ、ま、申
 こ、も、敵、も、時、計、を、ぬ、女、開、國、毎、こ、の、め、り、ゆ、極、極、極、を、
 ら、し、色、こ、の、お、き、お、あ、せ、し、な、と、お、申、お、申、お、申、を
 弄、お、申、お、申、お、申、の、お、申、お、申、お、申、の、お、申、お、申、
 とい、も、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 の、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、

る、お、の、お、い、西、洋、法、國、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 明、し、と、夫、ん、ら、廣、く、洋、に、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 法、を、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 能、く、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 と、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 の、こ、と、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 とも、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 一、つ、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 能、く、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 を、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、
 法、の、開、國、の、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、お、申、

録七のちり而中一を乃之を心を高めて西洋法四古
今のもはるを集まておろす之を授け中より中銭の
ゆゑをばるる中四物を同心して中蔵まぶをいん
とすふもはるの順序より強し此人は漢書の方を
中蔵といふも及字書をも法をも若もさうして
進くも中蔵と事法を明くして進く字書の四を従
して之をいふも成る物より中蔵の流の事先者
として世の名をいふも中蔵と字書の事四をい
一印を如めて日本國と稱ししてその中蔵と
さうしてその志の所在をいふも是れ也

○教字為の所書

中村翁言日本人名の考ふる所して余自少小好
聚書及論知余而所藏和漢之書二萬有餘冊
矣以下防祝融之故離居室數十步論一池而
南築書庫而藏焉又固高重鑰以防亡失故
若有下欲搜索之事則腰鑰而出室風雨書一
晦一手持傘一手秉燭啓鑰而入庫焉東索
西求書冊縱橫如獺祭魚如此而或有獲或有
不獲矣然而如漢土人名一有萬姓統譜等書出
未備而尚可以資考核至于吾邦人名一則除三
王將相歌人高僧之表々若明者外未嘗不以其
類被索一故一瘖然而及也



以下全て
白紙

